

植村善博・治水神・禹王研究会『禹王と治水の地域史』、古今書院、  
2019年9月、153p、2,500円＋税

谷端 郷\*

## 1. はじめに

評者にとって禹王に関する知識は、古代中国の伝説的皇帝の1人という高校世界史程度のものでしかなかった。しかし、本書の著者<sup>1)</sup>らの活動に触れる中で、「禹」の文字を刻む碑が日本各地に数多くあり、禹王を信仰する文化まで存在することを知ることになって、その奥深さに驚かされてきた。著者らの活動が最初に実を結んだのが、2013年に人文書院より刊行された『治水神禹王をたずねる旅』(以下、前著)<sup>2)</sup>であり、本書はその続編にあたる。

本書は、前著出版以降、新たに確認された76件を含む禹王遺跡132件(2019年3月末現在)の全体像と、著者自身による「禹王をたずねる旅」の詳細な記録である。本書の目的は「あとがき」にも記されているように「禹王研究のおもしろさと大切さ、現状と問題点を広く知ってもらうこと、今後の調査研究や災害遺産として利用できる情報を提供すること」(本書146頁)である。結論を先取りして言えば、この目的は本書において十二分に達せられていると感じる。

ここでは本書の内容を章ごとに紹介するとともに、その意義を若干考察してみたい。なお、「禹王遺跡」の定義は、「禹王の像や肖像画、禹を祀る廟・祠・宮、大禹・神禹・夏禹・文命などの文字(いずれも禹王の別称)を刻んだ石碑や墓碑」(本書12頁)である。

## 2. 各章の概観

本書は5章構成である。以下各章の内容を概観していこう。

第1章と第2章は総論的な章である。第1章「禹王とは」では、そもそも禹王とは何者なのか、そして近年再

評価の動きがみられる中国の大禹信仰と、中国本土とは異なる台湾の水仙尊王信仰の現況が報告される。第2章「日本の禹王遺跡」では、日本における禹王遺跡の特徴が分布や成立の目的、年代に着目して分析される。

第3章から第5章は日本各地に点在する禹王遺跡の事例紹介である。第3章「禹王と治水信仰」では、禹王が治水神として信仰の対象とされている事例が挙げられる。具体的には京都の鴨川、大分県臼杵市、神奈川県酒匂川一帯、大阪府島本町、岐阜県高須輪中の5事例である。このうち鴨川の禹王廟は現存しないが、他4事例は碑や壇、像などが現存しており、それぞれの地で毎年祭礼も執り行われているという。本書42頁の写真に写る「禹王塔相撲大会」(大分県臼杵市)と書かれた幟旗を見ると、地域のシンボルとして禹王が地域に根付いている様子を実際に確認することができる。

また、著者は禹王信仰の現況報告に加え、なぜその地域で禹王が祀られるようになったのか、背景の考察にも力を入れる。たとえば、大分県臼杵市の事例では、江戸時代における臼杵藩の災害発生頻度の検討から、臼杵市における禹王遺跡(「大禹后稷合祀壇」)の建立時期と旱魃や水害などの災害が急増する時期との重なりが示された。このような災害史研究から禹王遺跡を再検討することは、禹王遺跡の災害文化的な価値を再評価することにもつながるので重要である。

第4章「顕彰にみる禹王」では、「禹」の文字が刻まれている碑の事例が紹介される。具体的には香川県高松市、天竜川、鬼怒川、淀川の事例である。これらの碑は治水貢献者や土木事業の顕彰碑であり、その碑文の中で顕彰された人物が禹王に勝るとも劣らない人物であると、あるいはその事業が禹王の事績に勝るとも劣らないものであると讃えられている。そして、これらの碑をめぐる地域史が丁寧な紐解かれ、高松の西嶋八兵衛や淀川の大橋房太郎など治水や利水に尽力した地域の偉人、あるいは彼らによって成し遂げられた治水事業や利水事業の実

\* 宮崎産業経営大学講師

績が浮き彫りにされていく。この章の禹王は第3章のような信仰の対象とみなせるものではないが、碑に刻まれた「禹」の文字から、地域の偉人による大事業の完遂が地域住民にとっての悲願であったことが窺える。

第5章「禹王文化の諸相」では、遺物や地名に「禹」の名が残る事例が紹介される。具体的には福島県伊達市、岡山県倉敷市、大徳寺龍光院ほか日本庭園内の禹門、京都御所、群馬県片品村、沖縄（琉球大国）、さらには朝鮮半島の事例である。ここでも「禹」の名が残る謎解きが進められるとともに、治水に限らず様々なかたちで日本に受容された禹王の多面性を垣間見ることができる。これらのことから、禹王がまさに文化（「禹王文化」）として根付いていることに納得させられる。

### 3. おわりに

本書第一の意義は、禹王遺跡の現況が克明に記され、とくに地域に根差した禹王信仰の現場が報じられている点に資料的価値が認められる。また、禹王遺跡の立地をめぐる背景まで考察されることにより、禹王遺跡を地域史の文脈の中に位置づけようとしている点も意義深い。ただし、本書全般を通じて、整理をやや欠いている点が惜まれる。たとえば、第2章で日本における禹王遺跡が分類されているが、著者による禹王遺跡の分類と第3章から第5章までに取り上げた各遺跡との関係が示されていないため、取り上げられた事例が典型的な例外なのか判然としない。禹王遺跡の全体像をめぐる分析は、大邑のより詳細なもの<sup>3)</sup>もあるので、これら先行研究を踏まえた議論が第2章では望まれた。

本書第二の意義は、禹王をめぐる東アジアの比較文化論の試みである。このような東アジアレベルの禹王文化論を管見の限り評者は他に知らず、意欲的な試みといえる。この現時点での到達点ともいべきものが第5章の第12図（本書144頁）であろう<sup>4)</sup>。ここでは、日本の本土が「治水神禹王文化圏」と設定され、治水神としての禹王の受容に日本（本土）の独自性を求めようとして

いる。また、東アジアの他の地域にもそれぞれ文化圏が設定されていることから、禹王文化をめぐる地域差に興味は尽きない。ただし、本書においてそれほど多くの言及はないので、この議論はおそらく緒に就いたばかりであろう。今後、著者や後学の研究者によるさらなる検討が進められ、活発な議論が行われることを期待したい。

本書第三の意義は、フィールドワークの良質な実践例ということである。本書の禹王をめぐる興味深い情報の数々は、どれも著者のフィールドワークによって収集されたものである。ここには現地踏査、文献収集、関係者への聞き取りなどフィールドワークの様々な技法が使われているので、フィールドワークをする際のヒントが数多く詰まっている。本書は、地域史や災害関係の研究者だけでなく、フィールドワークを組み込んだ地域文化の調べ学習や郷土教育、ウォークイベントなどに取り組みたいと考えている全国の学校教員や郷土史家、まちづくり・まちおこし関係者にも勧めたい。

本書は全体を通して簡にして要を得た記述で読みやすい。とくに各事例における地域概観は地理学者の力量がいかに発揮されており、評者自身学ぶところが多かった。また、多数の図版が読みの助けになるだけでなく、各章の扉に掲げられた設問のおかげで謎解きのように楽しみながら読むこともできる。さらに、脚注にある地形用語や工事用語の解説もありがたい。そして、最近新たに設けられた地図記号の自然災害伝承碑についての言及も時宜を得ていると感じた。このように本書は禹王に魅せられた著者の心配りが随所に窺える良書である。

### 注

- 1) 本書は植村善博と治水神・禹王研究会との共著だが、本稿ではとくに断りのない限り著者は第一著者である植村のことをいう。
- 2) 大脇良夫・植村善博編著『治水神禹王をたずねる旅』人文書院、2013、216頁。
- 3) 大邑潤三「日本の禹王遺跡の分類と立地分析」地理63-11、2018、44-51頁。
- 4) この図が本書ではやや唐突にでてくるが、以下の論文にこの図に関する詳細な説明があるので参照されたい。植村善博「東アジアの禹王遺跡と禹王文化圏」地理63-11、2018、6-13頁。